

Q.

デジタルの世界は
どこまで人をだませるのか？



人の感覚を再現するデジタル世界の中で、 人がいかに判断するかが大切になってきます。

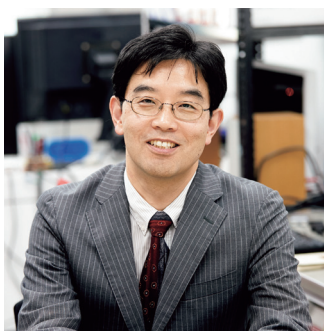


人の感覚から作られる デジタルの世界。

私たちが研究しているのは“音の世界”です。みなさんも映画館などで、臨場感溢れる音に出会ったことがあると思いますが、その音のほとんどは「こういう場面にはこうした音が効果的だ」と人工的に造られたものです。いわゆるデジタルの世界で仮想現実の空間を創りだしている訳です。スマートフォンから聞こえる声も、話し相手の声にとてもよく似せて造りだした音だというのは割と有名ですね。音に限らず、人間の行動、知覚は膨大な情報を生み出します。人の感覚をデジタルの情報に置き換え、人間の何百倍、何千倍の力で解析することで、先ほどの映画館のような臨場感ある仮想空間を創りだすことができるのです。

大切なのは、デジタルをどう 活用するかという人間の意志。

AIの登場で人間のする仕事は激減すると言われていますが、それでも多くの分野で人のアナログ的な感覚や判断が必要だったりします。デジタルが生み出す世界でも人の判断は大いに重要です。例えば、ヨーロッパの大聖堂で合唱団が歌っているシーンをデジタルで造り、ある人に聴かせたとします。するとその人は実際に大聖堂にいるかの感覚を体験することができます。でも、それは仮想のものであって、現実のものではありません。仮想空間の中で、人は普段できないような未知の体験をすることが可能になります。同時にどれだけリアルなものだとしても、現実には起き得ないという判断をすることが人にとって大切なことだと思います。デジタルの世界に取り込まれることなく、こうした仮想体験を上手に共有することによって、生活を豊かにし、人と人の新しいコミュニケーションを生み出すことも可能になるのです。



西野 隆典 先生

PROFILE

もともとコンピュータが好きで、小学生ぐらいからプログラミングをしていたという西野先生。コンピュータを使って、おもしろいことができればなんでもいいと思っていたときに、コンピュータがいっぱいある音の研究室を見つけ、この道に進んだそうです。しかし、進んでみると“音の世界”は果てしなく深かった、と実感。



学生時代の マイブーム

初めての賞でいただいて 長年使い続けているペン。

とにかくモノを捨てない主義ですね。このペンは東海地区の学会の場で発表したときにもらったもの。かれこれ17～18年ぐらい使っています。学生のときに初めてもらった賞(奨励賞)でうれしかったこともあります。が、使い勝手のよさは今も変わらないです。